

## 大学における文系理系横断の「フィールドワーク」授業

## An introduction to field work in the higher education

# 蟹澤 聡史 [1]

# Satoshi Kanisawa[1]

[1] なし

[1] none

東北大学では、全新生を対象に「基礎ゼミ」を第1 Semesterで行っている。1クラス20人以下の少人数教育である。大学教育への導入、イニシエーションを行うのが目的で、学部への専門教育導入の目的とは区別される。およそ150テーマが設定され、学生は希望によって振り分けられる。2005年度は1年生のほぼ全員にあたる2468名が受講した。希望者の多い場合は抽選により決定する。したがって各クラスにはいろいろな学部の学生が入る。担当の教員は各学部・研究科・研究所、さらに一部は退官教授も参加する。今回は、私が3年間この授業に参加した経験から、最近の若者がフィールドワークや地球環境に対してどのような興味を持っているかについて報告する。

私が提案した授業テーマは、「フィールドワークの勧め」「自然に親しむ - フィールドワークの面白さ」であった。受講生の学部分布は表の通りでほぼ全学部にわたっている。テーマ設定の動機は、キャンパス周辺の恵まれた地の利を活用して自然に親しむことを体得して欲しいと思ったことに始まる。

15年度 16年度 17年度

文 3 6 5

法 1 1 1

経 3 2 5

教 - - 1

理 3 3 1

医 - - 1

薬 - 1 -

工 2 4 4

農 - - 2

合計 12 17 20

高校時代に「地学」を学んだ学生は1割程度なので、大多数の学生は地学の知識はほとんどないといってよいであろう。また、「フィールドワーク」とはいても、地学に限らず、動植物、歴史、文学など広範囲にわたるので、期間の前半はもっぱらキャンパスの周辺の青葉山、竜の口峡谷、広瀬川の自然、仙台城址、付近の文学碑など、あるいは構内のメタセコイア、などを案内して、それらに親しむことを行った。「基礎ゼミ」の目的の一つに、発表、討論、調査、見学、実験、実習等の体験的・参加型の学習を重視するといったことがある。また、教員と学生、学生相互の人的つながりの形成、大学生活になじみ、順調に学生生活を開始することへの導入なども求められている。したがって、ひとりひとり見学を行った後、受講生一人一人にテーマを考えてもらい、それについての調査・見学を通して得られたことの発表・討論を行い、レポートを作成するという過程を経た。この際に、発表者の一方的な報告ではなく、全員参加によるディベートの雰囲気をつくるのが重要である。受講生のフィールドに対する興味は、全学部を通してかなり高く、代表的なテーマ例も次のように多岐にわたっている(カッコ内は所属学部)。 竜の口峡谷の火砕流(理)、時間とは何か(理)、石器の作り方(文)、工大グラウンド(青葉山)の観察(法)、青葉山の自然(工)、青葉山の自然を体感したことによる環境問題(経)、地震の経験(理)、植物と土壌との関係(理)、柳田国男の『一つ目小僧』の研究(文)、旧石器ねつ造事件(文)、竜の口の化石と北海道のアンモナイト(工)、太白山の地質(文)、川内のメタセコイアについて(経)、故郷の北上川と賢治のふるさと(薬)、宮城県北部の隠れ切支丹と製鉄(文)、消閑の勧め(工)、自然の観念の変遷(農)、自然の中の建築(医)、砂漠化(理)、殺生石・九尾の狐伝説とその歴史的背景(文)、岩手山の噴火と防災(文)、降水量と山形、宮城の昔話との関係(文)、仙台城と自然(文)、北原白秋と郷土の自然(経)、神話と自然について(文)

このような広範囲にわたるテーマについて、全てを1人で十分に指導することはたいへん困難ではあるが、フィールドを初めて経験した大多数の学生にとって、個々のテーマについて学部間の垣根を越えて討論するといった雰囲気は、たいへん新鮮に映ったようである。指導する側として注意すべき点は、フィールド調査の時の事故防止、当日の天候による予定変更の際の用意、訪問調査の際に相手側に事前コンタクトしておくなどがある。さらに、文献調査を主としたレポート作成の際に、インターネットによる安易な検索とコピー・ペーストを戒め、自分の目と足で観察し、調べる場合はできるだけ原典に当たることへの指導など、反省すべき点は多かったが、私自身、学生から多くのことを学んだ。